言葉の魔法

ちょっとした一言が人を変える力を持つことがある。
迷ったときの道標になる言葉、
ふと思い出して元気になれる言葉……。
確かな成果を残したビジネスパーソンたちに、
そんな言葉の魔法を聞いてみよう。

“じゃあまず、4%だね”

2010年の取締役会議で、障がい者雇用のための特例子会社設立を提案した際に、社長が言った言葉です。

4%というのは、そのとき盛り込んだいなげやグループの障がい者雇用率目標。この数字がいかに厳しいかは、1.8%の法定雇用率*でさえ企業の半数以上が未達成であることを見ても明らかです。でも日本には就労人口の4%相当の障がい者がいる。その数字にこだわることは「健全な社会の実現」を経営理念に掲げる当社にとって意味がある。そう考えた覚悟のうえでの提案でした。そんな目標は不可能だと判断される可能性もあったのです。ところが社長の口から出たのは「まず」という言葉。4%はあくまで第1ステップというメッセージでした。思ってもみない返答に驚きながらも、自分のなかにどんどん力がわいてくるのを感じました。プレッシャーよりも、この事業が期待されているということのほうがずしんと身にしみたのです。

特例子会社設立から約半年。計画を上回る勢いで雇用が進み、雇用率は2.5%から2.8%へと上昇しました。

正直、自分がここまで障がい者雇用にのめりこむとは思ってもいませんでした。9年前に厚生労働省の精神障害者雇用促進モデル事業に協力したのが始まりです。

彼らの誠実な仕事ぶり、その力を引き出すなかで「人財育成」の本質に目覚めていく上司、見る見る変わる職場のムード、事業終了後に当社での採用が決まった障がい者のご家族が喜ぶ姿を目の当たりにし、この「四方良し」の取り組みを支援していきたいと思ったのです。

私は典型的なサポータータイプで周りを引っ張るのはむしろ苦手です。それでも関わる人が次々と新たな課題へ水先案内してくれ、それに打ち込んでいるうちにいつの間にか特例子会社の設立まで来てしまった気がします。社長もその1人。冒頭の言葉からは、次の目標に向かっていく大きな力をもらったと思っています。

障がい者雇用率4%を目指して
特例子会社を立ち上げた人事本部リーダー

石川 誠氏

いなげや特例子会社　いなげや ウィング
管理運営部長（兼）事業推進部長

Ishikawa Makoto_1985年いなげや入社。店舗勤務を経て1987年人事部、2000年人事部リーダーとなる。2002年厚生労働省の精神障害者雇用促進モデル事業への協力をきっかけに、店舗でも精神障がい者雇用は可能と確信。社内への働きかけ、人事制度の拡充などを通じて、リーダー就任当時は1.3%だった障がい者雇用率を2.5%に押し上げる。人事本部リーダー在職中、特例子会社設立を社内提案し2010年10月より現職。設立後半年で雇用率を2.8%へと上昇させた。

＊法定雇用率……民間企業の場合、従業員56名以上の企業を対象に、週20時間以上勤務する従業員数の1.8%相当の障がい者雇用が義務付けられている。従業員201名以上の企業については未達成人数１名につき月額5万円の納付金が必要。2010年6月1日現在の法定雇用率達成企業（従業員56名以上）は47.0%。

Text = 荻原美佳　Photo = 刑部友康

海上自衛隊の護衛艦ゆうぎり。乗組員は１年のうち約3分の2をこの艦内で過ごす。

“ここは海だからマーメイドでいい”

アナウンサーから海上自衛官に転身し
隊員の心のケアにあたる臨床心理士

山下吏良氏

海上自衛隊佐世保地方総監部
管理部メンタルヘルス担当幹部　1等海尉

Yamashita Rira_1995年同志社大学卒業後、テレビ大阪報道部記者、NHK鳥取放送局のキャスターを務めたのち、フリーアナウンサーに。この間、阪神・淡路大震災や臓器移植問題の取材を通して、メンタルヘルスケアに興味を持ち、京都ノートルダム女子大学大学院で臨床心理学を履修。2007年に臨床心理士として海上自衛隊に入隊。現在佐世保地方総監部のメンタルヘルスチームが受ける相談は年間2500件。著書に『女子アナ・吏良の海上自衛隊メンタルヘルス奮闘記』（講談社）がある。

海上自衛隊のなかで、臨床心理士として隊員のカウンセリングやメンタルヘルス講習会を実施するほか、記念行事での司会や外部向けの講演など、さまざまな活動をしています。活力の源になっているのがこの言葉です。

テレビ局勤務時代に阪神・淡路大震災や臓器移植問題の取材を経験し、心のケアの重要性を感じた私は、フリーでアナウンサーの仕事を続けながら、臨床心理士を目指して大学院に入学。授業で患者役として箱庭療法*を受けた際、私が玩具の1つに選んだ人魚姫が深層心理のなかの自分の姿だと教授から指摘されました。アナウンサーと臨床心理士の世界、どちらで生きていくのか迷っていると。そして、臨床心理士としてやっていくのなら、美しい「声」と引き換えに人間になった人魚姫と同様、アナウンサーの仕事は辞めるべきだと言われたのです。

大学院修了後しばらくして、臨床心理士一本でいくと決め、たまたま募集を目にした海上自衛隊に入隊しました。始めのうちは仕事の進め方に悩み、同じ部署の女性の先輩によく相談していました。そんななか、話が箱庭療法に及んだ際、私は人魚姫のエピソードに触れたのです。すると先輩は、「ここは海上自衛隊だから、海でも陸でも活躍できるマーメイドでいい。これまでの経験を捨てるのではなく、活かしていけばいいのよ」と言ってくれた。今までの自分を否定する必要はないと気付かされ、嬉しくて涙がでました。

それ以来、積極的に「しゃべり」の仕事を引き受け、多くの人に私自身を知ってもらったことで、メンタルヘルスに関心を寄せてもらえたり、人事部門や指揮官などを交えた多角的な活動ができるようになりました。また、35歳前後の仲間と「チーム35」を結成して、広く海上自衛隊をPRする活動も始めています。今後も、自衛隊員が心身ともに健全であり続けるために、自分の知識や経験を活かしていきたいと思います。

＊箱庭療法は、心理療法の一種で、治療者が見守るなか、患者が箱のなかに思いのままに玩具を入れて箱庭を作っていく手法。患者の自己治癒力が活性化され、また、箱庭作品は患者の内界の表現として役立てることができる。

Text = 湊 美和　　Photo = 刑部友康